

学問の再生と創成 ——ガラパゴス化の回避——

井上真

12年前の問いかけ

「研究過程への住民参加は専門家としての研究者の位置づけを大きく変革することになり、相当な覚悟が必要とされる。専門家と非専門家との垣根が大幅に低くなるからである。つまり、研究への住民参加は、現在のアカデミズムのあり方を変革する契機となり、同時に環境学に関わっている者の研究者としてのアイデンティティーを喪失させる事態へと展開することも予想される。しかし、フィールド研究という営みが環境問題の克服に少しでも役に立つべきであるとするならば、人々(地域住民や市民)のための、人々による研究がもっと市民権を得るべきであろう。環境学におけるフィールド研究をおこなうハイブリッド研究者は、地域の人々と共に歩むファシリテーターとして位置づけられるのかも知れない。

このように、環境学としてのフィールド研究は、現在のアカデミズムに変革を迫るという意味で実に革新的な営みであり、かつ研究者の存在意義を根本的に問うきわどさをも兼ね備えている。環境学としてのフィールド研究は、それ故に学問的にも大いなる価値と魅力を持つものなのである。

幸いながらフィールド研究者が夢想的・非現実的と言う意味でのドン・キホーテになることはないだろう。なぜならば、フィールド研究者はフィールドから常に現実的な刺激を受け続けるからである。正義感に基づく行動的人間としてのドン・キホーテが、フィールド研究者のイメージなのではなからうか。ハイブリッド・アプローチによって学問分野を越境し、さらにアカデミズムからの越境も視野に入れた、質実剛健で且つしなやかなフィールド研究を遂行する『実践する研究者』が増えることを願っている。」

(井上,2002, pp.254-255)

少し長くなったが、以上は12年前の拙稿(井上, 2002)の最後の部分からの引用である。「環境学」という用語を「地域研究」や「マレーシア研究」に代えても内容は変わらない。これからの研究は、アカデミズム内部での「学問分野の越境」がまずは必要であり、そのための基本的な考え方および研究の進め方を「ハイブリッド・アプローチ」(=「一人学際」)としてこの拙稿の前半で論じた。そして、途上国を対象とする開発学の議論のみならず水俣病問題に患者の立場から真摯に取り組んだ学際的研究グループの成果、それにモード論(ギボンズ,1997)を参照しつつ、研究者の倫理問題を「アカデミズムからの越境」として後半で論じた。

挫折と再出発

私はこのような問題意識に従って、東カリマンタンにおいて1990年代後半から2000年代前半にかけて、対象地の村人たちに寄り添う形で行動しつつ研究を進める「参加型アクションリサーチ」を試みた。

その成果として拙著(井上,2004; 井上,2006)などの成果を出した。しかし、日本に本職を持っている身である。いつも短期間しか現地に滞在できない。したがって、私自身が参加型アクションリサーチを満足にできるはずがなく、やむを得ず現地の研究者仲間に代わってやってもらう方法をとった。

当時の私は、開発分野で参加型農村調査法(PRA)がもてはやされる一方で、住民参加アプローチを採用したというアリバイを示すためのツールとしてしか PRA を用いない風潮や PRA のマニュアル化に対して強い違和感をもっていた。しかし、実際に自分が置かれた立場を前提とし、配分する時間など様々な制約の中でやれることを工夫した結果がアリバイ的な住民参加であり貢献であるとするならば、私のやっていること、すなわち参加型アクションリサーチと言いつつ自分では殆ど参加できない状態も本質は同じなのではないか……。批判の矛先が自分に向くことになったのである。追い打ちをかけるように、妻の病気と私自身の病気が相次いで見つかり、それ以来 6 年にわたり海外渡航ができなくなった。

短期でもよいから毎年フィールドを訪問し続けることが「自分はフィールド研究者である」と言える最低限の条件だと思う。その意味で、当時の私はすでにフィールド研究者といえない状況にあった。悔しいけれど現実を認めるしかない。フィールド研究者であればこそ、しっかりと現実を把握すべきであろう。このことを強烈に自覚していたため、気持ちを入れ替え、視点をずらして現地への貢献を含む研究のあり方を考えた。私にしかできない調査対象の人々への恩返しの仕事がきっとあるはずだ……。

「レジデント型研究者」への協力

その答えがすぐ身近にあることに気付いた。私が博士論文で対象として以来つきあってきたのは Kenyah 人である。そのこともあり、現地の大学講師 N さんとは継続して協力していた。N さんは私と同年代の Kenyah 人であり、数少ない先住民出身の大学講師であった。彼と知り合ったばかりの頃、「日本で博士号をとりませんか?」と問いかけところ、「そんな夢が適ったらうれしいですね」と冗談混じりの答えが返ってきた。その後数年間の付き合いを通して彼の可能性を確信した私は、日本学術振興会(JSPS)の論博事業への応募を勧めていた。そして、私が海外渡航できなくなったちょうどその頃、N さんは JSPS の論博研究員として採択された。

N さんの故郷はアポカヤン(ボルネオ中央高地)で、親戚の人々が継続して住んでいた。両親はアポカヤンからマハカム川上流域に仲間と一緒に移住し、州都サマリンダ市に客船で 3 日の距離にある村に居を構えていた。そして、彼の奥様の親戚はサマリンダ近郊に作られたアクセスの良い Kenyah 人の村で生活していた。この 3 村を対象に、焼畑農業を中心とする生業および社会関係の比較研究をおこなった。N さんは地域社会に定住する研究者という意味での「レジデント型研究者」(佐藤,2009)ではないが、同じ民族でかつ自分の出身地や親族の村を対象とした研究をおこなったので、レジデント型研究者に近い立場で研究を試みたといえる。

N さんは地域社会で起こっている問題を地域の文脈で感じ取ることができるばかりか、地域社会に一定程度コミットすることができる。そして、外国人である私はそれを記述し、分析・解釈するためのヒントを

提供し論理立ての側面支援をおこなう……。これこそが、私ならではの Kenyah 人への恩返し形ではないか……。結局、Nさんは2009年度に東京大学から博士号を授与された。インドネシアの Kenyah 人博士第一号のはずであったが、数ヶ月前にインドネシア国内の大学で学位取得した同胞がいたとのことで、Kenyah 人 2 番目の博士誕生となった。次の計画は、ボルネオ中央高地で生まれ紆余曲折を経て日本で博士号を取得した N さんのライフストーリーを、N さんを筆頭著者として共同執筆し、英語書籍で出版することだ。すでに執筆作業を始めている。

「新しい野の学問」への関わり方

「日本人である私 \leftrightarrow Kenyah 人研究者である N さん \leftrightarrow 村で暮らしている Kenyah の人々」という一連の関係を通して、地域で暮らす人々に寄り添った研究の一端を担う。これならば、外国人であっても、また訪問頻度や滞在期間が限られていても、それなりの寄与が可能であろう。短期で現地に行き知ったつもりになったり、現地の人々に迷惑かも知れないのに勝手に貢献したつもりになったりするケースはできるだけ減らすべきであろう。それよりも、研究者としての自分にできることは殆どないことを知り、「無知の知」に基づく控えめな協力による恩返しの方が、少なくとも今の私には相応しい。

外国を対象とした研究ばかりではなく、東北復興支援に関わる研究でも同じであるが、自分の研究が「役立つ」ことをあまりに強調しすぎない方がよい。どのみち、研究対象地の人々のことを本当に考えているのか、研究成果を得るためのデータ収集源としてしか位置づけていないのかどうかは、すぐにわかる。金の切れ目が縁の切れ目とばかりに、プロジェクト予算が終了したとたんに現地から手を引いてしまうならば、後者であることは間違いない。断続的でもいいし、わずかな私費で繋いででもいいし、細々ともいい、とにかく長期的に関わる気持ちを持ち、それを実行しているならば、前者であろう。

12 年前に「アカデミズムからの越境」を主張した時は、私自身が「レジデント型研究者」のような存在、つまり対象の地域社会の一翼を担うような存在になることも想定していた。結局、私にそれはできなかった。代わりに、あくまでもアカデミズムに軸足を置きながら、アカデミズムと現場、あるいは研究と実践を「繋ぐ」役割の一旦を果たすことはできたと思うし、今後も継続するつもりである。このような「繋ぐ」役割を果たすことにより、アカデミックにいながらも、研究者のみならず「アカデミックの外の場」の人々によって展開される「新しい野の学問」(菅,2013)の一端を担うことはできるはずである。

学問のガラパゴス化による脳死

12 年前の最初の問いかけである「学問分野の越境」に関連する面白い論考がある。魅力的に輝いていた文化人類学と比べ、自分が属する老舗ともいえる学問分野の中で小長谷(2013)は「学問の脳死判定基準」を考えたという。第 1 は、排除の言動が目立つようになること。新しい学問であれば「それも〇〇学」と食欲に領域を拡大するが、脳死寸前の学問では「それは〇〇学ではない」という言動が学会などで目立つようになる。第 2 は学史が目立つようになること。プロスペクト(展望)よりもレトロスペクト(回顧)が多くなるのは健全ではない。第 3 は出自の多様性が小さくなること。ある大学の研究室の教員

が自分の所の卒業生で占められるようになると、全体としての考え方の柔軟性が低下する。

これらの脳死判定基準は、どんな学問分野であってもその老化現象を感覚的に判断する際に役立つものである。ハイブリッド・アプローチによる「学問分野の越境」を主張し、学生たちも巻き込んで実践してきた立場からすると、小長谷の議論は実に痛快である。「それは〇〇学ではない」どころか「それは〇〇派のやり方だ」などという発言を若手研究者が当たり前のようにするようになると、その学問分野の脳死は間近に迫っていると考えた方が良さそうだ。学問の老化現象が進んだ時は、「原点に返れ」運動よりも、門戸を開いて新しい血を導入し再生を図る方が有効なのかもしれない。

もちろん、それぞれの学問には作法がある。いや作法は不可欠である。学問的な方法論があつてこそ、学問は成り立つからである。だからこそ、新しい学問分野が創成されたあと、次第に方法論が精練され、それと同時にその学問分野の外枠が明確になり、外部の世界と明確な境界線が引かれるようになる。その後は、外部から隔絶された内輪での「最適化」が進行する。その結果、外部との互換性を失い孤立して取り残され、あらゆる「越境」の試み拒絶・排除され、ダイナミックな現実社会にとっての意義は失われてゆく。つまり、学問分野の「ガラパゴス化」が進展し、「脳死」に至るのである。

ガラパゴス化を回避するための鍵

論理的に言えば、脳死を予防するためにはガラパゴス化の回避が不可欠となる。学問に方法論が不可欠である限り、ガラパゴス化の回避は、どんなアプローチを自分たちの学問分野の方法論として承認するか判断次第である。この方法論には、概念の定義、分析視点、分析枠組み、理論枠組み、記述や解釈の形式など、様々なものが含まれる。したがって、極論すると、学会誌の査読など研究成果の評価の際に、どのくらい方法論の幅をもたせて採択の判断をするのかが、ガラパゴス化の進展を回避し、将来の脳死を予防しつつ再生を果たす鍵となる。

ただし、新しく創成された学際的学問分野での研究評価では注意すべき点がある。それは、方法論の外枠は設けず（「これは〇〇学ではない」と排除しないこと）、最低条件だけを意識すること（品質保証）である。この微妙とも言えるさじ加減を適切に実行するのはかなり難しい。とはいえ、具体的にどうすればよいのかについて、私自身の経験から言えることがある。

ある学際的分野 X の研究として書かれた論文 Y の方法論が、既存の学問分野 A に関連するものであったとしよう。この場合の評価について、評価者（審査者）の出自により二つのケースに分けて考えてみよう。まずは、学問分野 A を出自とする研究者が論文 Y を評価（審査）する場合である。論文 Y の方法論が評価者の出自である既存学問分野 A の観点から評価して「完璧」ではなくても、「許せる範囲」に入っているかどうかをまずは適切に判断することが重要である。この判断を厳しくしすぎると論文 Y は却下となる。そうであれば、学際的学問分野 X の存在意義は否定され、既存の学問分野 A だけが存在すれば事足りるということになりかねない。逆に、この判断を甘くしすぎると、学際的学問分野 X の論文に対する品質保証が出来なくなってしまう。これにより、最低限の質を確保したうえで、既存の研究分野 A ではできないような新しい試みを積極的に高く評価する姿勢が求められる。

次に、論文 Y に関連する既存学問分野 A ではなく B を出自とする研究者が評価する場合である。多くの場合は、異なる視点から有益なコメントや評価が得られ、学際的分野 X の研究が活性化されてゆく。このような異分野からの関与があるからこそ学際的学問分野の面白さが維持され展開されてゆくのである。私自身、自分が所属する専攻でこの楽しさを味わっている。

しかし、そうでない場合も希ではあるが見受けられる。評価者が既存学問分野 B の基準に照らして論文 Y を酷評し、論文 Y は研究として成立しないという判定を下してしまう。「研究課題に対して方法論の選択を誤った」とか「方法論の用い方自体が間違っている」など、論文 Y の研究としての土台を崩すような評価を、本当に学問的出自の異なる評価者ができるものだろうか。また、仮に評価者が天才的な能力を持つ人でそれができたとしても、果たしてそのような切り捨てるような評価をすべきであろうか。私はそれに対して大いなる疑問を呈したい。そんなことでは、学際的学問分野の進展を望むことはできなくなってしまう。特に学問的出自の異なる研究に対して、評価者は「無知の知」に基づき「遠慮がち」に評価するくらいがよいのではないか。

学際的研究の必要性や、新しい学問分野の創成を説く人は多い。しかし、外野から感想を述べているのか、当事者として自ら責任を持って推進していくのかによる違いがあるように思う。それは、その研究者が評価者(査読者)になったときに判明すると思う。何だか自分の首を絞めるようなことを書いてしまったようだ。

日本マレーシア学会(JAMS)は会員の多様性からして、「学問分野の越境」のみならず「アカデミズムからの越境」も実践しやすいだろう。そして、学会の運営方針に記されているように「マレーシア学」を提示するために学会誌「マレーシア研究」を創刊した。つまり、学会誌へ投稿された論文の査読作業を通して品質保証をしながら、学際的学問分野としての「マレーシア学」を創成している過程にある、と思う。であればこそ、今のうちから脳死を予防しガラパゴス化を回避するため、方法論の柔軟性を意識的に維持する努力をやっておくのが得策だと思う。もっとも、私の直感では、日本マレーシア学会のガラパゴス化はそもそもあり得ないと思っているが・・・。

文献

- 井上真, 2002. 「越境するフィールド研究の可能性」, 石弘之(編)『環境学の技法』. 東京大学出版会.
- 井上真, 2004. 『コモنزの思想を求めて:カリマンタンの森で考える』. 岩波書店.
- 井上真(編), 2006. 『躍動するフィールドワーク:研究と実践をつなぐ』世界思想社.
- ギボンズ、マイケル(編)／小林信一(監訳), 1997. 『現代社会と知の創造:モード論とは何か』. 丸善.
- 小長谷有紀, 2013. 「文化人類学の輝きを求めて」『民博通信』, No.143, p.2-7.
- 佐藤哲, 2009. 「知識から智慧へ:土着的知識と科学的知識をつなぐレジデント型研究機関」, 鬼頭秀一・福永真弓(編)『環境倫理学』. 東京大学出版会.
- 菅豊, 2013. 『「新しい野の学問」の時代へ:知識生産と社会実践をつなぐために』. 岩波書店.